



profile

●よこやま ひろし / 1939 年横浜市生まれ。63 年東京総合写真専門学校卒。教務課助手を経てフリーに。以後、山岳写真、スキー写真の分野からネイチャーフォトの世界へ。この 20 年、道東の自然をライフワークとして取り組む。2008 年摩周湖の環境保全イベントに合わせて開催した個展「魅惑の四季」と、09 年 4 月から 1 年間北海道新聞根室・釧路版夕刊に 40 回連載したフォトエッセイはその成果をまとめたものとして注目を浴びる。著書、写真集に「立山」(時事通信社)、「トップスキーヤー」(スキージャーナル社)、「自然のこころ」「スキーのこころ」2 部作、「横山宏のネイチャーフォト講座」(山と溪谷社)等。弟子屈町川湯駅前在住。

写真家・横山宏

夢の大地

先日、久しぶりに上京した。用足しの合間に生まれ故郷の横浜や電気街の秋葉原、銀座などに出歩くのも楽しみのひとつ。ところがそんな気分はアツという間に打ちくだかれてしまった。どこへ行っても溢れる人と車、さらに量販店に入れば多彩色どりの商品がこれでもかと言わんばかりに陳列され、ボリュームを上げた BGM が鳴り響く。東京に住んでいた頃には気にもとめなかったことが、今は苦痛に感じてしまう。早く用を済ませ、静かな川湯に戻りたいと願うばかりであった。

多感な少年時代に憧れ、夢にまで見た北の大地。写真家となった私はそのベースを縁あって川湯とした。今思えば、20 年程前のことであった。その流れの中でいつしか川湯の人となり、都会は異次元の世界のようになっていたのだ。

阿寒国立公園エリアの要衝ともいえる川上郡弟子屈町。本州の人に「今どこに居るのか?」と問われた時にこの地名だけを言うと「それは日本のどこ?」と聞かれる。そこですかさず「摩周湖の山裾で広大な屈斜路カルデラの中。私が住む川湯駅前は大横綱、大鵬の実家がある川湯温泉の近くだよ」と答えると、皆、一様に「わあ、いいなあ。そんな所に住んで好きな写真が撮れて」と言われる。

確かにその通り、玄関を出れば目の前に噴煙なびく硫黄山、車で数十分走れば摩周湖や藻琴山の展望台、美幌峠や津別峠も手のうちだ。さらに走れば阿寒や根室、知床や網走など、写真愛好家ならよだれが垂れるような撮影ポイントへ足を延ばすことも可能だ。写し、走り回って川湯に戻れば天下の名湯が私を癒してくれる。こんなロケーションのすばらしい所は、日本中探してもそういくつもないだろう。

ともあれ、その環境に身を置くことが出来る私は幸せ者である。弟子屈町内だけでも私の限られた人生では写しきれない魅力的な被写体が存在する。特に四季折々に自然が放つ稀なる現象は神秘と幻想に満ち溢れ、私を魅了する。写しても写しても、もうこれで良い、というところに辿りつかない。

だからいつも思う。もし生まれ変われることが出来たなら、今度は子供の時から川湯に住み、さらに写し続けたいと。他には何もいらぬ。少年の頃憧れた北の大地は、時空を越えても、私にとって永遠の夢の大地のままなのである。

2010 年 4 月中旬、春の風が吹きすさんだ屈斜路湖に、オホーツク海や根室海峡で稀に見られる流氷山脈のような現象の氷山が突然出現した。湖面に漂っていた氷が湖畔に打ち寄せられ隆起したのだ。所用で東京に行く前日、私は幸運にもこの現象に遭遇し、写しとめることが出来た。

